bunka@ryukyushimpo.co.jp
TEL 098-865-5162

沈黙に向き合う

沖縄戦 聞き取り47年

〈117〉

石原　昌家

歴史修正主義を正す⑬

世界連邦は希望の光

東アジアに不戦共同体を

琉球新報12月17日付は、一面トップ大見出しの〈安保大転換　沖縄最前線／反撃力保有を明記／3文書決定、米軍と一体化／首相「南西部隊を倍増」〉以下関連記事が6面にわたって載っている。私も緊急に「識者談話」を依頼され、連載の原稿執筆を中断した。その一部を抜き出す。

戦争の最前線に

〈平和憲法を持つ日本の姿が他国にミサイル攻撃ができる軍事［武装］国家へと変えられた。〉〈「東京から」という意味なのか、遠方で侵攻を阻止・排除するため、現在の南西諸島のミサイル基地をさらに強化し、戦闘に備える方針を決定している。さらに民間空港・港湾の利用拡大など、沖縄戦の時と同様に軍官民の一体化を強力に推進しようとしている。戦時中、沖縄は天皇制国家護持の犠牲となった。沖縄返還交渉時には日本の安全のためなら沖縄の犠牲もいとわないとする政府見解をまとめていた。今回の文書も日本の安全のため、沖縄をミサイル戦争の最前線に立たせようと躍起になっている。沖縄県民はこの事実を直視し、沖縄県の軍官民一体化を阻止する声を張り上げ、知事を叱咤激励する時だ。（平和学）〉（26面）

沖縄戦では、県民は否応なしに日本（皇土）防衛の最前線に立たされ、未曾有の大被害をうけた。にもかかわらず、今、一部の人だけが"否"の声をあげ、大多数がミサイル基地化に応じ、ミサイル戦争の最前線に立たされることに沈黙している。拱手傍観している場合ではないというのが私の談話記事だ。

「無軍備国家」

人類破滅の危機に直面した先人たちは生き残れる可能性の一つを見つけていた。その考えを知るきっかけになったのが、今も続くウクライナでの戦争だった。それは「無戦世界シリーズ」として（第100回2022年4月14日から104回6月16日）書き記してきた。講演などでも、その世界連邦運動にふれたから、それについて長年研究しているという米田佐代子さんからその論考の掲載誌（写真参照）が送られた。その論文構成を紹介するだけでも読者にその中身は伝わるだろう。

「平塚らいてうの戦後平和思想とその実践―自筆メモ『世界連邦運動』を読み解く」のタイトル以下、はじめに―らいてう『自伝』の世界連邦記述をめぐって　Ⅰ　らいてうの自筆メモ『世界連邦運動』（『メモ』）について　Ⅱ　『メモ』にみるらいてうと「世界連邦」思想　Ⅲ　日本の世界連邦運動の軌跡　Ⅳ　世界連邦運動とらいてうの立場　むすび―らいてうの平和思想と「世界連邦」。

その構成を見ただけでも私は未知の世界に分け入る気持ちに駆られた。連載第103回（22年5月27日）で記した世界連邦建設琉球同盟の結成に登場している人物の詳細がわかり、錚々たる顔ぶれに期待されていたことが判明した。その組織を再開させる義務を改めて痛感した。1954年11月の第2回世界連邦アジア会議で決議のひとつに「世界に対する檄」として「日本不侵略の声明を全世界に要求する決議」をしていることに胸躍った。〈「軍備を永久に持たぬと誓った日本国憲法は、単に国民の決意であるのみならず、全人類の世界平和念願の象徴である」として（軍）「全世界の各国民が無防備日本を断じて侵略せぬということ」を声明するように求めるというもので、日本を憲法に基づく「無軍備国家」と明記している〉（30ページ）

これが実現していれば、専守防衛という武装国家の第一歩をふまず、今日の戦争の危機も避けることができたはずだと痛感している。

沖縄でも胎動

きな臭さがたちこめるなかで、希望の光をたぐりよせて、連載を閉じたい。

国会や各自治体の世界連邦運動の一環として、その道のりが沖縄でも胎動しはじめた。鹿児島大学の平和学者木村朗教授が定年退職後、東アジア不戦共同体のネットワークづくりのため、活動拠点として沖縄に居を移し、ジャーナリストとして東アジア共同体・沖縄（琉球）研究会を活動軸に、沖縄・鹿児島・福岡・東京間で、八面六臂の活躍がその芽生えのひとつと思える。木村氏は、現在FMぎのわんラジオで「沖縄平和トーキングラジオ～南から風を～」を開局し、沖縄の女性研究者をレギュラー陣として、ゲストを迎えたり、次世代の育成にも力を注いでいる。私も2カ月に一度1時間ちかく、本連載の初回からの内容を精読している木村氏が質問する形で放送中である。さらにインターネットメディアであるISF独立言論フォーラムを東京で開設し、その編集長も務めている。木村氏は「鳩山元総理がその実現を提唱されている東アジア共同体はアジア版EU（ヨーロッパ共同体）ともいうべきものであり、日中韓の友好を柱に相互の人的文化的交流や共通の経済的利益などを基礎にASEAN諸国なども合わせて東アジア地域に不戦共同体の構築を目指すものです。将来的にはこれから生まれてくるその他の地域共同体も含めて世界連邦の構築につながるという展望も見えてくると考えています」と、一条の光を投じている。

琉球新報の社説（2022年5月7日）でも、その道のりへ、具体的提案をしている。沖縄戦体験の教訓から、県民は〈「人間の安全保障」を要求してきた。その実現のために、これまで国連大学など国連機関誘致を目指してきた。新たな基地や自衛隊増強ではなく、世界平和に貢献し沖縄と日本の安全保障につながる国連機関を設置すべきだ〉と説くのも、世界連邦への階段のひとつだろう。

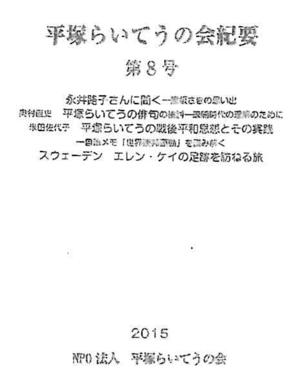
また、沖縄大学学長を務めた仲地博氏が、22年7月の参議院選挙結果を新聞の投稿欄「茶のみ話」に載せた一文が貴重だ。その概略を紹介したい。学生時代の先輩仲村渠哲勝氏（80歳、元大学教師）が茨城選挙区から立候補していることを知り、インターネットでその選挙公報を見たら「非武装で平和な琉球独立を目指すが、最終目標は世界連邦の創設」と将来像を語っている。先輩に電話で聞いたら、「目標は1000票、供託金300万円が没収されるのは承知の上」とのことだった。だが、獲得した票は4846票、目標の5倍近い。組織はまったくなし、カンパなし、たった一人の選挙公報だけの運動で、5千人近い有権者が投票してくれたというのがその内容だった。この茨城県有権者の投票行動は、一縷の希望を抱かせる。

連載のさいごに

5年3カ月、117回も連載させていただいた琉球新報社へまず、この場で深い感謝の気持ちを伝えたい。遠いカナダ、奈良、長野、京都をはじめ県内の読者からの感想や励まし、情報提供や私の問い合わせに研究時間をさいてご教示くださった専門家のみなさん、それぞれが執筆の意欲をわき立たせるエネルギー源だった。異口同音に「本になるのだろうね」、という言葉も将来世代に伝えねば、という気持ちにさせ、悔いの残らない内容にしていったら、連載回数が増えていった。同時に研究者として自己批判・反省したうえで、モットーにしている日々自己更新を実践する場にもなり、琉球新報文化欄は私の研究室のような存在になっていた。

また幸いなことに、沖縄から東京へ出版活動の場を広げたインパクト出版会の川満昭広氏が、琉球新報社の支えの下、この連載を一冊の本にするという運びになった。発刊の際のあとがきで、歴代の連載担当記者諸氏やお世話になった方々のお名前を記して、感謝の気持ちを伝えたい。さらに、書く機会を失った事柄は出版する時に補記したい。

さいごに、寝室や居間までも資料の山にして、家族に多大なストレスを与え続けてきたことを詫びて、執筆を終える。（おわり）



平塚らいてうの会紀要
第8号
永井路子さんに聞く―[illegible]の思い出
奥村直史　平塚らいてうの俳句の検討―[illegible]時代の[illegible]のために
米田佐代子　平塚らいてうの戦後平和思想とその実践
―自筆メモ「世界連邦運動」を読み解く
スウェーデン　エレン・ケイの足跡を訪ねる旅
2015
NPO法人　平塚らいてうの会

「平塚らいてうの会紀要」第8号